

南無阿弥陀仏は  
私のいのち



平成23年  
9月号

NO.  
404

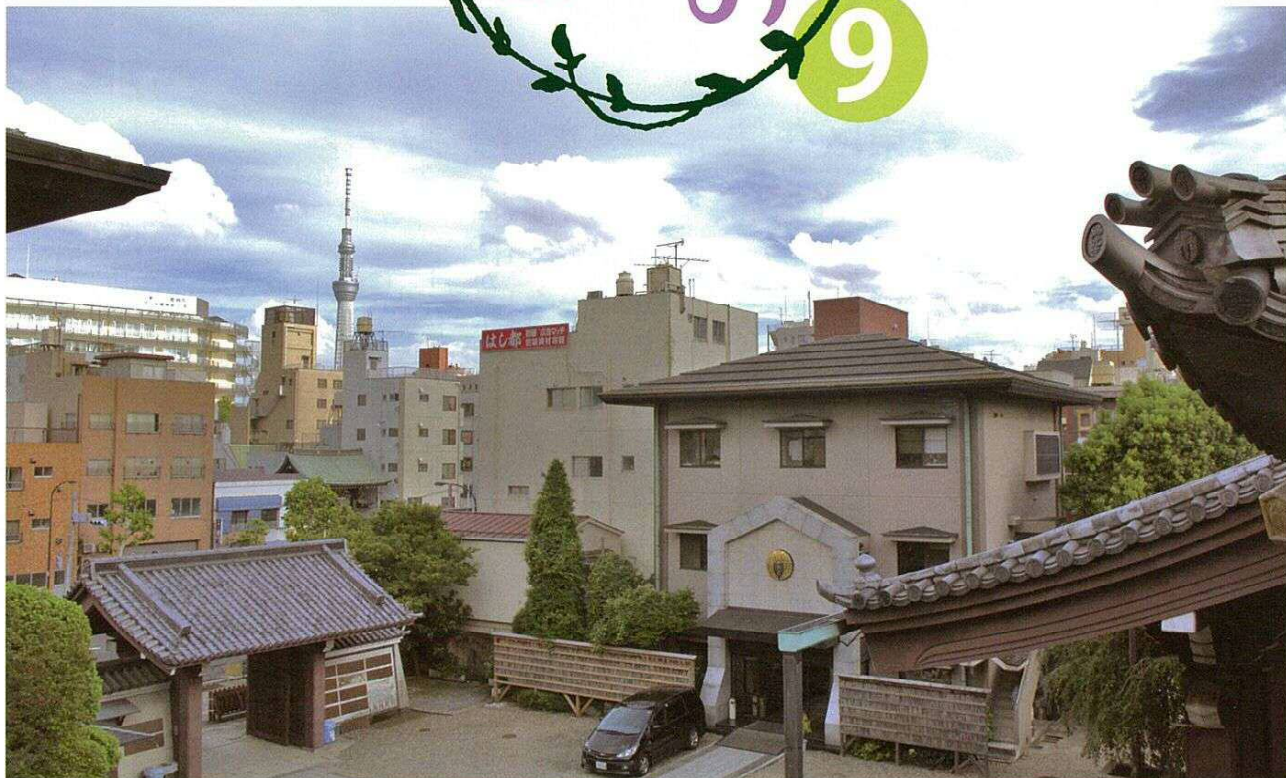
〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19

発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺

TEL 03-3875-3351

FAX 03-3875-6796

発行人  
編集人 岸本 秀一



## 「再刊にあたって」

お釈迦さまの生きられた時代を正法の時代という。お釈迦さまの教えがあり、その教えを行じ、結果を出す時代である。仏教はその歴史の中で「正像末の三時観」という時代認識を持つようになる。正法の次は像法の時代である。形があっても中身を伴わない時代であり、更に形すら保てない末法の時代へと続く。

中国の曇鸞大師（四七六―五四二）は「五濁の世、無仏の時」（『論註』）と、自身の生きる時代を定義した。お釈迦さま在世の時から千年を過ぎ、社会も人も濁っている時代であれば、人から仏へではなく、仏（仏願力）から人へである、と龍樹菩薩と天親菩薩の教えに導かれての定義であった。

曇鸞大師の教えを受けて、親鸞聖人（二七三―二六二）は、和讃に「像末五濁の世となりて 釈迦の遺教かくれしむ 弥陀の悲願ひろまりて 念仏往生さかりなり」と詠われた。「遺教」とは部派仏教の經典群であろう。「弥陀の悲願」とは大乗仏教の經典群、具体的には『無量寿経』を指す。お釈迦さまの時代から遙かに遠く、異なる社会において、仏道とは何か、仏教とは何かを問い続けた歴史そのものが、時代や社会を貫く真理として、弥陀の悲願を明らかにした。「念仏往生さかりなり」とは、人であることの悲しみと喜びを担いながらも生きることの意味を問い訪ねるあゆみがあるということ。

当年は親鸞聖人が示寂されて七五〇年目である。この機会に、『えこお』を再刊し、共にみ教えに、生きることの意味を問い訪ねたい。

# 「同じ目線で」

台東区在住 榎本 隆さん



「群生海」第一回は西徳寺仏教青年会会長で、西徳寺近くで花吉生花店を営まれている榎本隆さんです。

最近、自分の親も年取るんだなって父親を見ていて思うんです。私は今六十二歳で青年会の会長でありながら孫がいるんですよ（笑）。父親は八十九歳になるのかな。お袋は五十九歳の時に亡くなったんです。私が三十二、三歳の時だったかな。すごいショックで、「人生ってこんなもんか」とか「人生ってつまらないな」ということを感じたんです。それだけ落ち込んでたんです。

その時に、先日就職になられた岸本さんが「これを読め」と一冊の本をくれたんです。宮城顕さんの『真の仏弟子』っていう本だったんですけど、その一節に「人間が早くしてなくなっただからかわいそうだとか、何で死んだんだって嘆いても、その人の供養にならない。短い人生かもしれないけど、その人が一生懸命生きたんだから、「ご苦労さん」と言うのが本当の供養だ」という言葉があって、約

三十年経つけど、それが未だに忘れられないんですよ。だから友達のお父さんとかお母さんが亡くなったときに、この言葉を偉そうに言っちゃうんです（笑）。それだけ自分の心に残ってるんです。それでも、年を取った父親になかなか「ご苦労さん」と言えないですよ。そういうのがあるから今まで仏教青年会で話を聞こうっていうのがあるのかな。

青年会に入っただのはその後ですね。最初担当されたのは日野さんと岸本さんと、宗先生の「名告り」という講演が青年会の最初だったかな。

私は二代目の会長になるわけなんです。青年会の会長をもう二十年ぐらいたせてもらってるけど、お坊さんを含めて自分の子供ぐらいの人たちが同年代みたいに接してくれるのはうれしいし、そうできるっていうのは西徳寺の青年会だなって感じますね。年齢に関係なく接することができるっていうのはうれしいと思いますよ。同じような感覚で付き合ってくれるっていうのはうれしい。普通だ

と自分の親父みたいな世代だとかなか話しづらいでしょう。それを友達みたいな感覚で付き合ってくれる、付き合えるっていうのはうれしいと思う。お寺のお坊さんの何人かが自分の息子より年下なんですけど、あらためて聞いて、「ああそっか」という感じで付き合ってるから、感覚がないっていうかそういう青年会の付き合っているのは良いよね。

岸本住職に言わせると「もう年齢的に青年会じゃないから名前変えたらどうだ」と言われるんですけど（笑）。そういうのは青年会の特色だと思います。他の会員さんも年上だからって年上ぶった態度を取らないでしょう。同じような目線に立っているか、それを私も心がけているんです。聞法会に出させてもらって色々聞かせてもらうけど、『正信偈』にしても、昔から字が読めない人が詠い継がれてきたっていうことはすごいなって感じますね。そういうのを私たちも大事にしていきたいです。

（聞き手 仲井真裕）

「あなたの宗教は」と聞かれて、正確に宗派の名前が答えられない人でも、家は「きみょうむりょうじゆによひ帰命無量寿如来」と言える人は多いと思いますが、次の世代まで伝わって行く姿勢でお勤めできているでしょうか。真宗門徒に親しい『正信偈』さんは、『正信念仏偈』(お念仏でなければ救われない身に感動する歌)といわれて、親鸞聖人の主著・真宗の根本聖典である『教行信証』の「行巻」の最後にある、漢文の讃歌です。

親鸞聖人のお念仏は、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(『歎異抄』)と、法然上人との出会いにおいて、戴かれた「ただ念仏」でありました。そして、親鸞聖人が「ただ念仏」でしか救われないと頷かれたのは、「たとい、法然聖人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそろう。そのゆえは、しよ自余の行もはげみて、仏になるべかりける

身が、念仏をもうして、地獄におちてそうらわばこそ、すかされたまつりて、という後悔もそうらわめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。(たとえ、法然上人にだまされて、念仏

満足に修められないこの身においては、どうしても地獄だけが決まった住家なのです。)(『歎異抄』)と言う、どうしようもない「わが身」の発見があつたからでした。



お念仏は、「南無阿弥陀仏」と申す

ことですが、正月の本山の掲示板に「たまねぎ・むいたら・なみだが出た・こしよふつたら・くしやみが出た・手を合わせたら・念仏が出た」とありましたように、手を合わせた時によく出ます。しかし、私たちは、いつも阿弥陀仏の願いに順じて、お念仏しているわけではあ

りません。平生は、口癖であつたり、よそ事を考えてたりしていることが多く、熱心に念仏する時は、自分の願い事をかなえて欲しいと思つて、申しているのではないのでしょうか。そうした、自分の姿に気付いて頭の下

がらない私たちは、「ただ念仏」になれません。「ただ念仏になれず、いつもおつりが欲しい念仏なのです。

それで、親鸞聖人は、『正信偈』「正信念仏偈」と「ただ念仏」と正信することの大切さを確認されたのです。

「正信」の「正」は、「二」に「止」と書き「正信」の「正」は、「二」に「止」と書きます。「ただ念仏」二つに止まるには、私のお「念仏」が、いつも物頼みの「念物」にしている愚かさを、知らされ、教えられ続けていくほかありません。

『正信偈』は、前半に、『大無量寿経』によって、「お念仏」の根本の精神とそご利益を示し、後半には、そのお念仏を伝承してくださった歴史を、インドの龍樹菩薩・天親菩薩・中国の曇鸞大師・道綽禪師・善導大師・日本の源信僧都・源空上人(法然上人)と七人の高僧の教えをあげて讚え、最後に「ただこの高僧の説を信ずべし」と示して、六十行、百二十句の『正信偈』を完結されるのです。

# 「山門の言葉」

## 世の中の

## 善し悪しを

## 決めるのは

## 私の分別心

今月の山門の言葉は、私が最近思わされることがあり、このような言葉を出させていただいた。

最近「分別心」このことが気になっている。人や物事を評価するのも分別心。自分自身を悩ませるのも分別心。このようなことが言えるのではないか。

震災以降いろいろなことが報道され、映像や文字だけで被災地を、あるいは原発が及ぼしている影響について考えていないだろうか。これらの情報をもとに私達は自分自身にとって、状況が悪くならないように、いろいろ判断をしてきた。善いも悪いもそういう情報をもとに判断している。判断しているのは、私の分別心である。

現代に特有といえる原発問題であれば、放射能による人体への影響

であるとか、食料への問題とかは、住む場所によって受け止め方が変わるかもしれない。安心も不安も「今の私にとって」ということが大前提である。分別心といっても、私にとって悪くならなければよいという所に落ち着いている。

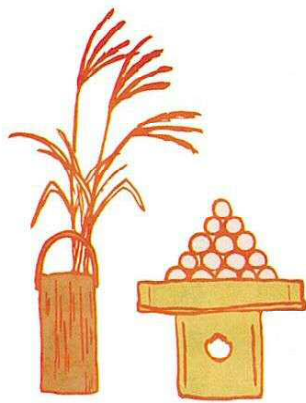
そしてこの時代・社会からはみ出ないようにと、必死になって生きている。そういう点からいえば、実は時代や社会そのものに押し流されて生活しているともいえる。

流されながらも自分にとって都合の良い時代・社会を望んでいる。つまり、どこまでも自分自身に執着し続けている。そこから離れられない。その結果、私の思うようにいかないことから悩みや苦しみが生まれてくる。

そのような私に目を向けさせて下

さるのが仏教ではないだろうか。私の思いから離れることが出来ない、私一人ではどうにもならないという現実に気づかせて下さる。そこに、私の心に依るのではなく、仏の心に依ることを勧めて下さる。そういう現実の私達を背負って立って下さるといふことが、救われていく内容ではないか。現実を離れて仏教を学ぶのではなく、今どのように生きているのかというところから学ばせてもらうのではないかと感じている。

(大橋伊知郎 記)



## 秋季永代経法要のご案内

『阿弥陀経』には、阿弥陀仏の浄土は西方にあるといい、『観無量寿経』には、その浄土を思い浮かべる方法が説かれています。太陽が真西に沈む彼岸の中日は、その浄土を思い浮かべるのに最も相応しい日でありました。浄土とは阿弥陀仏の国土であり、私たちの暮らすこの世界を「此岸」というのに対し、「彼岸」ともいいます。古代インドでは「パーラミター」(波羅蜜多)といい、「到彼岸」と訳されました。彼岸へ到達するという意味です。今日では「到」も略され「彼岸」とだけ呼び慣わしています。彼岸へは六波羅蜜という菩薩の六種の行によって到達するといわれます。しかし阿弥陀仏の浄土は、念仏申す一声のうちに浄土が私を包むのです。浄土がやって来るのです。それはお念仏に、すでに菩薩の行が行じられているからです。

彼岸会とは、仏とその国とに出会う、触れ合う期間であり、その国の住人は、先立って行かれた先祖であったり、先輩であったりします。しかし何よりも、彼岸会は私と浄土を結ぶ大切な仏事であります。私が、私の人生に意味を見出す機会なのです。

日時 平成23年9月22日(木) 午後1時30分から  
場所 西徳寺 本堂  
法話 岸本住職 高橋 淳

## 日誌

7月26日

責任役員会・総代会  
仏教青年会夏期研修会  
法話 岸本住職

7月27日・28日 宗祖忌

7月30日 合唱団「エコー」練習

8月6日 合唱団「エコー」練習

8月7日・8日 中興忌

8月13日～16日 孟蘭盆会

## えこお志お礼

浦安市	窪澤 仁 様
板橋区	木下 好江 様
武蔵野市	津田 直子 様
江東区	野口 一恵 様
栃木県	斉藤 吉郎 様
狛江市	酒見 はま子 様

# 掲 示 板

9月

- 3日(土) 午後2時 評議員会定例役員会  
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 6日(火) 午後7時 仏教青年会 『歎異抄』に聞く  
講師 宗 正元師
- 8日(木) 午後1時半 教行信証『信巻』に聞く(第71回)  
講師 宗 正元師
- 10日(土) 午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く  
法話 木村主任
- 13日(火) 午後4時 総代会
- 14日(水) 午後1時 婦人会聞法会「法脈の輝きに遇わん」  
『高僧和讃』に聞く
- 17日(土) 午後1時半 定例聞法会  
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 20日(火)～26日(月) 秋季彼岸会
- 22日(木) 午後1時半 秋季永代経法要  
法話 岸本住職 高橋 淳

10月

- 1日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 8日(土) 午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く  
法話 山崎 哲
- 9日(日) 午後2時 中央ブロック会総会・聞法会(西徳寺)
- 15日(土) 午後1時半 定例聞法会
- 16日(日) 午後2時 城東ブロック会聞法会(小岩区民館)
- 18日(火) 午後7時 仏教青年会座談会
- 19日(水) 午後1時 婦人会聞法会「法脈の輝きに遇わん」  
『高僧和讃』に聞く
- 20日(木) 午後1時半 教行信証『信巻』に聞く(第72回)  
講師 宗 正元師
- 22日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習  
午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く  
法話 神山 多加志
- 29日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 30日(日) 午後2時 城南ブロック会聞法会  
(目黒さつき会館)

## 編集後記

平成18年4月号をもって休刊していました『えこお』がいよいよ再刊される運びとなりました。休刊中の「寺務所だより」から通算して第404号としての新たなスタートです。

これからは職員一同、切磋琢磨して編集に携わって参りたいと思っております。ご門徒の皆様にも是非、ご意見ご要望等を寄せていただき、写真など投稿していただくと幸いです。どうか宜しくお願い致します。  
(木村主任)